

## 〔研究ノート〕

# ケインズの『確率論』・再論

中 村 壽 雄

### 目次

#### 序—珍しい訪問者—

1. 哲学者としてのケインズ
  2. 『確率論』の概要
  3. 当時の『確率論』への評価
- 結び

#### 序—珍しい訪問者—



今、ここに、一枚のスナップ写真がある。1991（平成3）年6月7日の日付が読めるから、次に述べる研究報告会もこの日に開催されたことが分かる。報告者はDr. Rod O'Donnell と言い、ケインズ研究の新生面を切り開いた新進研究者であった<sup>(1)</sup>。周知のように、本学は昭和60（1985）年春の附属図書館新築、落成を記念し、新たに「貴重図書・史

(1) スキデルスキーによる“ケインジアン”の区別では、1950年代や1960年代の“熱狂的な”タイプに対して、1980年代以降は“哲学的”ケインジアンが出現し、Bradley Bateman, Anna Carabelli, John Davis, Roderick O'Donnell, Athol Fitzgibbon, Suzanne Helburn, Tony Lawson, Bruce Littleboy, Ted Winslow が列挙されているが、1982年にケンブリッジ大学へPh. D. のために提出されたO'Donnellの学位請求論文‘Keynes: Philosophy and Economics’が、この新しい潮流の嚆矢となったとしている。  
cf. Robert Skidelsky, *John Maynard Keynes*, Vol. 2, *The Economist as Saviour 1920-1937*, 1992, pp.82-83 (Appendix 3).

O'Donnellとこの論文については、次の資料でも、同様の紹介が見られる。

cf. Charles R. McCann, Jr. (ed.), *John Maynard Keynes: critical responses*, Vol. I, 1998, p. 2 (Introduction).

料」を購入、所蔵し、国内外の研究者に便宜を図っているが、そのうち、本小論で対象とするのは、「ロイ・ハロッド文書」である<sup>(2)</sup>。ところが、二度に亘るオイル・ショックを経た1970年代末から1980年代になると、サッチャリズムやレーガノミックスに見られるように、マネタリズムやサプライサイダーの主張が重視され、従来のケインズ的な財政・金融政策への評価は低下し、ケインズ経済学への関心も薄れたかのように思われた。従って、本学図書館への来訪者も少なく、私自身にしても、ハロッドの「ケインズ伝<sup>(3)</sup>」より、キングズ・カレッジの「ケインズ文書」を中心にし続々と公刊が予定されたスキデルスキーの「ケインズ伝<sup>(4)</sup>」に関心が移った次第である。その点では、この貴重な来訪者の研究態度とその意図が注目された。

彼の本学図書館来訪の目的は、言うまでもなく、有名なハロッドによる伝記の「ケインズ関係資料」の吟味と、今1つ、ハロッド自身の研究内容や人柄に関係する資料の探求や発見にあった。(以上は、研究報告会で彼自身が述べた事柄である。)滞在期間の数ヶ月が終了し、次の目的地に向かう直前の一日、同学の本学教員、関心のある本学有志数名の前で、滞在による成果と当人の本来の研究成果を披露することが、この研究報告会の主旨であった。

以下に、当日のレジュメを基にして、本小論との関連で重要と思われる諸点を取り上げよう<sup>(5)</sup>。

## 1. 哲学者としてのケインズ

J. M. ケインズがケンブリッジ大学の学生時代に専攻したのは数学であったが<sup>(6)</sup>、終生に及ぶ活動では、その多才振りに定評がある。例えば、甥のミロ・ケインズが編集したエッセイ集でも、各分野の専門家による的確な指摘がなされている<sup>(7)</sup>。その中に、R. B. ブレイスウェイトの論考「哲学者としてのケインズ」もある<sup>(8)</sup>が、彼は次章で取り上げる『確率

---

(2) この文書の内容については、永年、一橋大学付属図書館の司書を勤め、最終的には、本学教授(経済史担当)で退職された細谷新治氏による詳しい紹介がある。

細谷新治、「ロイ・ハロッド文書」細見—「パート・ホゼリッツ文庫」もあわせて—『學鏡』昭和60年3月号、8-19頁。

(3) cf. R. F. Harrod, *The Life of John Maynard Keynes*, 1951. (塩野谷九十九訳『ケインズ伝〔改訳版〕』上、下巻、東洋経済新報社、昭和42年)

(4) cf. Robert Skidelsky, *John Maynard Keynes*, Vol. 1, *Hopes Betrayed 1883-1920*, 1983. (宮崎義一監訳、古屋隆訳『ジョン・メイナード・ケインズⅠ』東洋経済新報社、昭和62年、同監訳、同訳『ジョン・メイナード・ケインズⅡ』同社、1992年)

Robert Skidelsky, *John Maynard Keynes*, Vol. 2, *The Economist as Saviour 1920-1937*, 1992.

Robert Skidelsky, *John Maynard Keynes*, Vol. 3, *Fighting for Britain 1937-1946*, 2000.

(5) R. O'Donnell, *New Insight into The Thought of J. M. Keynes, The Relevance of his Philosophy to the Understanding of his Economics and Politics*, 1991. (タイプ版)

(6) この点については、既に、いろいろな伝記で紹介済みであるが、次の文献にも、簡潔な紹介が見られる。福岡正夫『ケインズ』東洋経済新報社、1997年、第2章、特に、24頁。

(7) cf. Milo Keynes (ed.), *Essays on John Maynard Keynes*, 1975. (佐伯彰一、早坂忠訳『ケインズ 人・学問・活動』東洋経済新報社、昭和53年)

(8) cf. Milo Keynes (ed.), *op. cit.* (特に、邦訳では、第3部第22章)

論』(ケインズ全集第8巻)で、編者紹介も行っている<sup>(9)</sup>。

しかし、R. O'Donnell等の「新しいケインズ研究」の特色は、哲学が多才なケインズの才能の一面というよりも、むしろ、「ケインズの哲学」こそが、彼の経済学的著作は言うに及ばず、残余の著作でも基盤にあり、主要な役割を果たして、彼の哲学的著作や論考と経済学、政治、数学、美学等、多岐に亘る著作や見解の間には、数多くの関係が認められるから、ケインズの考えを完全に理解するには、何よりも、まず、彼の哲学から始めるべきだという点にある<sup>(10)</sup>。

以上のような発想に基づくケインズ研究がどういうことで「新しい」かと言えば、従来の、例えば、1940年代から1970年代までのケインズ研究は、往々にして、大多数の研究者等が哲学者ではなかったせい、当然のように、ケインズの哲学への関心は薄い、無視に近かった。その関心はあっても、彼の哲学と経済学は別個の存在かのように扱われることが多かったと思われる<sup>(11)</sup>。その点では、1970年代前半にケインズの主要な著作10巻が出版され、最終的には30巻に及ぶ、王立経済学会(The Royal Economic Society)のケインズ全集(The Collected Writings of John Maynard Keynes)でも、同様に、ケインズの“経済学者及び公人”としての立場に焦点が当てられていた<sup>(12)</sup>。さらに、ケインズの没後、ケインズ家の依頼で逸早く『ケインズ伝』をまとめたR. ハロッドの役割も大きかったと考えられる。ケインズを徹頭徹尾「経済学の申し子」かのように扱い、初期の『インドの通貨と金融』(1913年)から、大著『貨幣論』2巻(1930年)を経て、いわゆる『一般理論』(1936年)で“ケインズ革命”を成し遂げた経済学者という位置付けを不動のものとしたからである<sup>(13)</sup>。これに対し、哲学者としてのケインズに明確な焦点を当てる「新しい洞察」は、1970年代末に始まり、以後、次第に大きな潮流になったとR. O'Donnellは言う<sup>(14)</sup>。

既に述べたように、経済学の面では、“革命”と言われる程の大変革を成し遂げたとされるケインズであるが、R. O'Donnellによれば、哲学の面では、1903年(20歳)から1946年(没年)まで、その概念的枠組に特段の変化は一切無く、一貫性が認められると言う<sup>(15)</sup>。それぞれの伝記で明らかのように、ケンブリッジ大学の学生時代にG. E. ムーアや

---

(9) cf. J. M. Keynes, *A Treatise on Probability*, 1921. [The Royal Economic Society, The Collected Writings of John Maynard Keynes, Vol. VIII (1973), Editorial Foreword by R. B. Braithwaite, pp. xv~xxii.] 佐藤隆三訳『確率論(ケインズ全集第8巻)』東洋経済新報社、2010年、xvii頁~xxv頁。

(10) cf. R. O'Donnell, *op. cit.*

(11) 例えば、次の文献などもその典型例と考えられる。

cf. ex. J. A. Schumpeter, “John Maynard Keynes, 1883-1946,” *American Economic Review*, September 1946. (S. E. Harris, ed., *The New Economics*, 1947. に再録。日本銀行調査局譯『新しい経済学I』東洋経済新報社、昭和24年、110-156頁)

(12) cf. ex. The Royal Economic Society, *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Vol. VIII, General Introduction, pp. ix~xiii. (邦訳, xi~xv頁)

(13) cf. R. F. Harrod, *The Life of John Maynard Keynes*, 1951.

ハロッドの書き振りでは、ケインズの主要な著作(経済学関連が多い)の解説の間に、エピソードを散りばめるというスタイルが目立つのと、要所で、自分との関わりを仄めかすことがあるので、このような傾向が定着したと考えられる。

(14) cf. R. O'Donnell, *op. cit.*

(15) cf. R. O'Donnell, *op. cit.*

先に挙げたスキデルスキーの『ケインズ伝』にも言えることであるが、このR. O'Donnell等の著作にも見

B. ラッセルの影響を濃厚に受けて、「使徒会」(Apostles)でも、いくつか論文を発表している(1902, 1903年)が、インド省を退職する直前、ケンブリッジ大学キングス・カレッジのプライズ・フェローシップ(任期制の教授職)に応募するため「確率論研究」を提出する(1908年3月)。が、落選し、翌年(1909年3月)、多少の修正を加えたものの、同じテーマの論文を提出し直して、このプライズ・フェローシップに合格した<sup>(16)</sup>。その点から見れば、ケインズのケンブリッジ大学における職歴は、後の会計官等は別にして、言わば、哲学者として教歴を開始したに等しい。従って、それに伴う研究業績と目される『確率論』も、6年間の任期を勘案すれば、妥当と考えられるが、1914年までに完成の域に達していた。が、周知のように、1914年8月の第1次世界大戦の勃発とそれに伴う公務との関係で、結局、『確率論』の出版は1921年に延びた<sup>(17)</sup>。この間も、ケインズ自身は余暇のほとんどすべてをその推敲に費やすが、先の『インドの通貨と金融』(1913年)がA. マーシャルに激賞されたことなどもあり、次第に「通貨と金融」の専門家の定評を得て、経済学者の性格を濃厚に帯びていくことになる<sup>(18)</sup>。言うまでもなく、同じく、この間に公務との関わりで得た体験や、その際に発揮された彼の才能も、その方向に向かう大きな要因になったことと推察される。

『確率論』が、何故、数学や統計学の分野でなく、哲学的著作になるかという点については、次章での内容紹介で明らかになる。「経済学者」としてのケインズの評価が大きければ大きい程、R. B. プレイスウェイトのように、ケインズの哲学的著作は、この『確率論』と、1931年の(F. P. ラムゼーによるもの)書評だけと限定されがちであるが<sup>(19)</sup>、ケインズの哲学的著作は必ずしも以上の2点に留まらない。それらのいくつかについては、本小論の後の方でも取り上げるが、次章では、ケインズの哲学的著作の代表例と衆目の一致する『確率論』の概要を見ることにしよう。

## 2. 『確率論』の概要

今日の通常の扱いからすれば、確率は、むしろ、数学や統計学の応用領域に属するものと考えられるが、先にも述べたように、何故、ケインズの『確率論』が彼の哲学的著作の代表例と目され、R. O'Donnellらの「新しい」潮流では、この哲学的著作と彼の経済学や政治その他の著作との濃厚な関連が話題になるのだろうか。「易しくない」と言われる書

---

られる傾向は、キングズ・カレッジの「ケインズ文書」を始めとして、未刊行のケインズ関係資料を十分に吟味して書かれていることである。従って、従来の「ケインズ像」には、無かったり、あっても、不十分なところが補われている。こういう特色は、次の文献にも見られる。

Bradley W. Bateman, *Keynes's Uncertain Revolution*, The University of Michigan Press, 1996.

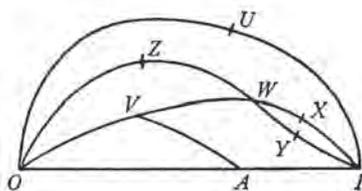
- (16) 前掲のハロッドによる『ケインズ伝〔改訳版〕下巻』「ケインズ年譜」(43頁)などを参照されたい。但し、この間の事情については、前掲のスキデルスキーによる『ケインズ伝』の該当部分の記述が遙に詳しい。
- (17) この間の事情については、R. B. プレイスウェイトの「哲学者としてのケインズ」(前掲文献)でも、簡潔な説明がなされている。
- (18) ケインズの『インドの通貨と金融』(1913年)の内容については、かつて、拙稿で取り上げたことがある。中村壽雄「ケインズ研究ノート(I)―インドの通貨と金融―」『千葉商大論叢』第12巻第4号-B(商経篇), 昭和50年3月, 73-87頁。
- (19) R. B. プレイスウェイト「哲学者としてのケインズ」, 前掲文献。

物である<sup>(20)</sup>が、邦訳も出版されたので、それを参考にしながら<sup>(21)</sup>、その概要を目次に基づいて辿ってみよう。

第I部 基本的概念は、第1章 確率の意味、第2章 確率の認識論、第3章 確率の可測性、第4章 無差別原理、第5章 確率決定の他の方法、第6章 議論の重み、第7章 歴史的回顧、第8章 確率の頻度説、第9章 第I部の構造(要約)、の9章から成る。

ここでの眼目は、ライプニッツを引用しつつ、「確率」は論理学の一部で、哲学の新しい領域の1つだということにある<sup>(22)</sup>。三段論法のようなものは別にして、直観的に得られる感覚や洞察、既知の知識は、確かなものなら、議論の「前提」としての命題を構成し、その「前提」に基づいて推論し、「結論」たる命題に到達するが、この両者の命題間には、确实性の度合いで完璧(确实、真、例えば、1)か、あるいは、逆の意味で完全(偽、例えば、0)かを両極にして、多くはこの中間に位置する関係が生じる。「確率」は、「前提」に対する「結論」の合理性に関する判断(もしくは信念)の度合いを示すものだ、と言う<sup>(23)</sup>。従って、このような確率(あるいは、蓋然性の判断)が、人々の意思決定や行為の基準になるとしても、その「可測性」は、例えば、第1図の $O$ 、 $A$ 、 $I$ のように、同一次元にあれば、数量的に明示され、代数的な処理が可能であるが、同じ図の他の文字のように、異次元同志では、必ずしも、このような一義的処理はでき兼ねる。つまり、数学者が確率の計算で代数的に処理できると言うのは、その対象が同一次元で数量的に比較可能で、図で例えるなら、 $O$ 、 $A$ 、 $I$ のように並ぶケースに限定されるのである<sup>(24)</sup>。経済学の用語で言えば、「基数的」効用を運用しているに等しい訳である。それだけに、「序数的」効用は言うに及ばず、効用自体が一義的な数量表示を許さない場合は、従来の数学的扱いの埒外となる。

第1図



それにもかかわらず、実務の面では、例えば、海上保険の引き受けや、司法の場での契約不履行に伴う妥当な賠償額の算定のように、確率が数量的、一義的に求められない場合

(20) cf. R. O'Donnell, *op. cit.* (但し、多くの読者の感想でもある。)

(21) 前掲、佐藤隆三訳『確率論』東洋経済新報社、2010年。但し、以下では、必ずしも邦訳には従わない。また、本章の脚注では、出典をケインズ『確率論』と略記する。

(22) ケインズ『確率論』第1章、特に、ライプニッツの引用はその冒頭部分。

(23) 前掲第1章、ほとんど彼の定義に近い。

(24) ケインズ『確率論』第3章、特に、第1図は、ケインズ全集第8巻(本文)の42頁による。この図で、 $O$ 、 $A$ 、 $I$ 以外の $U$ 、 $V$ 、 $W$ 、 $X$ 、 $Y$ 、 $Z$ と、 $O$ 、 $I$ の関係を三次元以上の多次元の意味で紹介しながら、彼の意図がこの二次元の表示で十分伝わるかどうか、多少、懸念が残る。

でも、実際には、妥当な「合理的判断」が要請される<sup>(25)</sup>。このような観点からすれば、「コイン・トス」や「サイコロ投げ」を素材にして、数学者や統計学者がよく話題にしてきた確率の「頻度説」（つまり、似たような「事象」の再起性を問う立場）をケインズが峻拒する理由も分かる気がする<sup>(26)</sup>。

第Ⅱ部 基本公理は、第10章 序、第11章 群論、特に、論理的一貫性、推論、論理的先行性に関説、第12章 推論と確率の定義と公理、第13章 必然的推論の基本公理、第14章 確率的（もしくは蓋然的）推論の基本公理、第15章 確率の定量的可測性と近似値、第16章 14章の公理への所見と、証言を含むその応用、第17章 逆確率及び平均を巡る問題点、から成る。

プライズ・フェローシップに応募した第1回目の「確率論研究」が却下されて以来、ケインズは W. E. ジョンソンの研究を意識して、記号と公理を多用する論証を心がけたようである<sup>(27)</sup>。確かに、記号や公理系で議論を進めれば、それだけ客観性が増すかのように思われる。しかし、後にラッセルが批判するように、これらの論証の大部分は、確率が数量的に把握できなければ、ケインズの言う「加法定理」や「乗法定理」も意味を持たないことになる<sup>(28)</sup>。この第Ⅱ部だけについて言えば、ケインズの確率の「可測性」の一般化が、逆に、議論全体の意義を限定する結果になっている。

第Ⅲ部 帰納と類似は、第18章 序、第19章 類似による議論の本質、第20章 例の増加、純然たる帰納の価値、第21章 帰納的議論の本質・続編、第22章 帰納法の正統性、第23章 帰納法の歴史、第Ⅲ部の注、から成る。

ここでは、主に、ベーコン、J. S. ミル、ヒュームを中心に、演繹法に対する帰納法による科学方法論の吟味が興味深く、特に、同質的な実験回数増加の意味や効果を持つかという問題提起がおもしろい<sup>(29)</sup>。

第Ⅳ部 確率の哲学的応用例は、第24章 客観的偶然性、ランダム性の意味、第25章 偶然性に起因する問題例、第26章 確率の行為への応用、から成る。

ここでも眼目は、ランダムということの本当の意味の吟味と、いわゆる「数学的期待値」に基づいて人々は行動するのか、また、それは望ましいことなのか、という問題である。一般には、確実性と道徳性には直接の関係は無く、ただ、確実な方が不確実よりは多少ま

---

(25) ケインズ『確率論』第3章。ここでの「美人コンテスト」の例は、各ブロック選出の候補者が最終的に若き貴族の伴侶になれるという約定が、途中まで進行したところで、破棄されたことに対する逸失利益の賠償を求めた裁判の事例であるが、周知のように、後の『一般理論』第12章では、「玄人筋の行う投資」の例で、少し条件を変え、新しい文脈の中ではあるが、再登場している。（ケインズ『一般理論』全集版第7巻、邦訳154頁）

(26) ケインズ『確率論』第8章。何回目かの試行でコインの表が出るか、裏が出るかという確率や、何回目の試行でサイコロの何の目が出るかというような、数学的統計的とも見える問題でも、もしも、コインやサイコロに「歪み」や細工があれば、話が変わってくる。これらは、彼が後の第Ⅴ部で詳しく論じている通りである。

(27) ケインズ『確率論』第10章で、ケインズ自身による詳しい「断り」がある。

(28) cf. Bertrand Russell, Review, *The Mathematical Gazette*, Vol. XI, no. 159 (July 1922), pp.119-125. (C. R. Maccan, Jr. ed., *John Maynard Keynes: critical responses*, Vol. I, 1998, pp.395-403. に再録) 但し、この点と、自分の主著 (*Principia Mathematica*) が Dr. Whitehead との共著である旨の修正を求めていることを除けば、ラッセルの批判は、大体において、好意的である。

(29) ケインズ『確率論』第Ⅲ部、特に第23章。

しだという程度に過ぎない<sup>(30)</sup>。

第V部 統計的推論の基本は、第27章 統計的推論の本質、第28章 大数法則、第29章 統計的頻度予測への事前確率適用—ベルヌーイ、ポアソン、チェビシェフの定理—、第30章 事後確率決定への統計的頻度の数学的応用—ラプラスの方法—、第31章 ベルヌーイ定理の逆活用、第32章 事後確率決定への統計的頻度の帰納的応用—レキシスの方法—、第33章 建設的理論の概要、から成る。

最後の第V部の各章では、ケインズの数学の素養が遺憾無く発揮されているが、共通しているのは、数学者による諸定理の統計への適用には、それぞれの前提条件の吟味が不可欠で、安易な適用を戒めている点である。さらに、「コイン・トス」や「サイコロ投げ」でも、試行が重ねられるにつれて、回目の試行の結果に対する判断は、それまでの結果の内容に左右される。もしも、一貫して、事前確率のままの判断が維持されるとしたら、その場合は、「コイン」や「サイコロ」に「歪みが無いこと」を示すだけ、という、一種の同義反復的な言明をしているに過ぎない<sup>(31)</sup>。まさに、経験を積むことで得られる知識の真価が問われるところである。

かくて、ケインズの『確率論』は、数学や統計学以上に、哲学的著作の特色が濃厚に出ていることが分かる。

### 3. 当時の『確率論』への評価

ケインズの『確率論』(1921年)に関して、専門的立場から広範かつ的確な評価を与えるもので随一と思われるものに、先に挙げた R. B. ブレイスウェイトの「哲学者としてのケインズ」(ミロ・ケインズ編、前掲書、1978年)がある<sup>(32)</sup>。一方、C. R. MaCann, Jr. ed., *John Maynard Keynes: critical responses*, Vol. I で、『確率論』刊行後早い時期(1921年から1924年まで)に、学術的基準に合うもので、その“書評”と目されるものが23篇登載されている<sup>(33)</sup>。そこには、500以上に及ぶ参考文献の渉猟を多として、確率はもとより、数学、統計学への教育的貢献を謝するようなものから、ハロッドの「覚え書き」で言われているような、大宗、好意的なもの、さらには、ケインズの手厳しい評価に反論する著名な数学者、統計学者による辛口の評価まで、様々なものが見られるが、多くは、ケインズの論述に則しての評価が展開されている。その中であって、先に挙げた B. ラッセルの書評を別にして<sup>(34)</sup>、一際、異彩を放つのが、F. P. ラムゼーの書評である<sup>(35)</sup>。

ここでは、後の1926年にラムゼーが「確率」について新たな問題提起をし、1931年にケ

(30) ケインズ、前掲書、第IV部、特に第26章。

(31) ケインズ、前掲書、第V部、特に第29章。

(32) cf. Miro Keynes (ed.), *op. cit.* (邦訳、第22章)

(33) cf. C. R. MaCann, Jr. (ed.), *op. cit.*, pp.319-481.

(34) cf. Bertrand Russell, *op. cit.*

ケインズ『確率論』第II部の貢献の大部分を実質的に否定しながらも、友人としての暖さが全体に感じられる書評になっている。

(35) cf. Frank P. Ramsey, Mr. Keynes on Probability, *The Cambridge Magazine*, vol. XI, no. 1 (January 1922). [C. R. MaCann, Jr. (ed.), *op. cit.*, pp.373-376. に再録]

インズがその一部を認めた<sup>(36)</sup>というようなやりとりは措いて、この1922年1月時点での書評の内容に絞って見ていこう。多くの評者が避ける第Ⅱ部以降の記号や公理を多用し数学的に展開される部分でも、簡潔かつ鮮かにその運用能力を示して、ケインズの欠陥を指摘しているが、第Ⅰ部の基本とされる部分についても、批判は鋭い。とりわけ、「定義不能」とされる「確率」の「可測性」について、ケインズの的な定義に基づいても、2つの「命題」間に0（偽）から1（真）の間の「確率関係」が合理的に推認されるとすれば、それぞれはやはり定量的把握が可能な筈で、「確率」は通常通りの「計算可能」なものでなければならぬ、と言う。そうでないと、ケインズのいうような、相互の大小関係は言うに及ばず、互いに等しくない、とか、互いにどちらも凌駕しない、と言うようなことはできない。もしも、その場合、数値が当てはめられない、とか、比較ができないということが、論理的な洞察力が不完全だから、とか、あるいは、確率は存在してもそれが未知だから、という理由によるのだとしたら、ケインズの所説では、それにもかかわらず、それ相当の値を定量的でなくても想定するというのだから、恰も、測量士が山の高さを測りに来て、その測定誤差を恐れる余り、その山は霧の中であって、他の山より高いとも低いとも言えないと説明するようなものだ、と言う。また、例えば、「私のカーペットは青い」という命題（前提）だけが所与の時に、「ナポレオンは偉大な将軍だった」という命題（結論）があるとして、両者間に合理的な確率関係は想定し難い。そもそも、こういう場合は、数値の当てはめ以前に、確率関係は無いのだ、と言う。大著をものして、「新奇で、勉強不足、不正確、不十分だが、もはや、時間的余裕も尽き、一応、自分なりには体系的にまとめたつもりなので、批判や拡張は後進に俟つ<sup>(37)</sup>」と出版に踏み切っても、若い新進研究者から、このように冷徹な書評を得れば、かなり深い所で受け留めざるを得なかったと思われる<sup>(38)</sup>。

## 結び

J. M. ケインズの「自由放任の終焉<sup>(39)</sup>」（1926年、フル・テキストの特に前半部分）、「わが孫たちの経済的可能性<sup>(40)</sup>」（1930年）、「若き日の信条<sup>(41)</sup>」（1938年発表、1949年、遺稿として刊行）が、それぞれ、哲学的著作であることは疑いを容れない。ところが、経済学的

(36) cf. Miro Keynes (ed.) *op. cit.* (邦訳、第22章のプレイスウエイトの紹介)

(37) cf. J. M. Keynes, *A Treatise on Probability*, *op. cit.*, Preface.

(38) cf. J. M. Keynes, *Essays in Biography*, 1933. [The Royal Economic Society, The Collected Writings of John Maynard Keynes, Vol.X (1972)]

この『人物評伝』におけるラムゼーの扱いは、Ⅰ 経済学者としてのラムゼー、よりも、Ⅱ 哲学者としてのラムゼー、の方が、断然、内容も豊富で興味深い記述になっている。シュンペーターが言う（前掲文献、邦訳129頁、注11）ように、ラムゼーの遺稿と言いつつ、ケインズの哲学に関する考えを吐露している箇所は、特に、印象的である。

(39) cf. J. M. Keynes, *Essays in Persuasion*, 1931, [Royal Economic Society, The Collected Writings of John Maynard Keynes, Vol. IX (1972)]

(40) cf. J. M. Keynes, *Essays in Persuasion*, *op. cit.*

(41) cf. J. M. Keynes, *Essays in Biography*, 1933. [Royal Economic Society, The Collected Writings of John Maynard Keynes, Vol. X (1972)]

ケインズの遺稿としての「若き日の信条」は、言うまでもなく、全集では、第10巻に収められた。

著作で彼の代表作とされる『一般理論<sup>(42)</sup>』でも、その最終章（第24章）は「一般理論の導く社会哲学に関する覚書」となっていて、その最後も「謎」のような文章で終わっている。だが、本小論をここまで進めてきて、自ら、この「謎」も解けるような気がする今日此頃である<sup>(43)</sup>。

（受理日：平成26年7月28日）

（校了日：平成26年8月25日）

---

(42) cf. J. M. Keynes, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936. [The Royal Economic Society, The Collected Writings of John Maynard Keynes, Vol. VIII (1973)]

(43) これも偏に Dr. O'Donnell らの研究成果に触れたお陰だと感謝している。尚、先の研究報告会では、『確率論』の経済学への応用、及び、『確率論』の政治への応用、さらに、近年における Dr. O'Donnell の研究成果（リスト）、本学図書館を中心に得られた（未刊分を含む）ハロッドの文献一覧の紹介もあったが、本小論では、割愛した。

cf. R. O'Donnell, *op. cit.*

—abstract—

On J. M. Keynes' *A Treatise on Probability*, revisited

Hisao Nakamura

(Prof. of Economic Theory)

Once Dr. Rod. O' Donnell said, New Insight into the Thought of J. M. Keynes was commenced in late '70s., and now it catches growing area. According to new approach, Keynes' philosophy is fundamental to the rest of his thought. Then, Dr. O'Donnell et. al. studied intensely his "*A Treatise on Probability* (1921)". From this viewpoint, we can see through the enigma of the last word of his *General Theory*.